

令和5年度 第1回 国立大学法人北海道大学経営協議会議事要旨

日 時 令和5年6月14日（水）10:00～12:00
場 所 事務局 大会議室
出席者 20名
（学外） 五十嵐、岩永、大槻、小坂、サコ、杉江、土屋、藤井、松沢、渡辺 各委員
（学内） 寶金、山口、横田、増田、山本、高橋、菅原、行松、梅原、渥美 各委員
欠席者 2名
（学外） 河合、三輪 各委員

（オブザーバー）
高橋監事

議 事

議事に先立ち、新任の委員について紹介があった後、令和4年度第5回経営協議会の議事要旨について確認があった。

【 議 題 】

1 総長選考・監察会議委員の選出について

総長から、資料1に基づき、経営協議会選出の総長選考・監察会議委員2名が本年3月末日及び4月末日で任期満了となったこと、及び、同委員1名が8月末日で任期満了となることから、後任の委員を選出する必要がある旨説明があり、全出席委員による投票により選出することが了承された。

引き続き総長から、投票立会人を高橋監事に依頼し、得票同数の場合の委員の決定方法及び補欠委員の選出等について説明があった後、投票を行った。

投票の結果、6月14日就任の総長選考・監察会議委員として小坂委員、渡辺委員が、9月1日就任の同委員として杉江委員が、それぞれ選出された。また、

6月14日から8月31日までの補欠委員としてサコ委員（次点）及び河合委員（次々点）が、9月1日からの補欠委員としてサコ委員（次点）及び土屋委員（次々点）が、それぞれ選出された。

2 令和6年度概算要求事項について

総長から、資料2に基づき、令和6年度概算要求事項について説明があり、審議した結果了承された。

引き続き総長から、順位付けについては総長に一任いただきたい旨発言があり、了承された。

（主な意見）

- ・「サステナブルデジタル変革ネットワーク」について、教育の観点では、教育を受ける側の人間形成や専門知識の習得が飛躍的にステップアップする構想がないと、情報化を進めてもトランスフォーメーションにならない。
- ・研究DXについても、研究の成果を著しく向上させるような、または研究のレベルアップを図れるような目標を設定することが求められている。
- ・新しい経営のやり方を発想する力や意欲が問われている中で、組織を作ると同時に、DXで現在の仕事をどのように飛躍させるか考えていただきたい。
- ・大学の研究者は、他の研究者や学部と連携して大学としての最適解を求める意識が乏しい。研究者自身がURAに頼ることなく、周囲と連携することで研究成果を上げる意識を持つべきである。
- ・半導体人材やカーボンニュートラル、DX化を含んだ、時宜を得た要求であり、経済界で進めている政策と親和性がある。
- ・チャットGPTを始めとするAIが浸透し始めている。教育に関してどのようにAIと親和性を作っていくか、北大なりの議論を進めてほしい。
- ・「Wellbeing 実現のための北極域学総合研究」は、Wellbeingなど流行りの言葉を付せばよいものではなく、北極域学総合研究が何をやるのか、北大らしさが滲み出るような表現とするとよい。
- ・「産学連携グローバル推進室」は素晴らしい取り組みである。産学連携については、産業界の課題でもあるし、大学としても力を入れて頂くところと思っている。

3 令和4事業年度決算について

総長から、資料3及び4に基づき、令和4事業年度の財務諸表の案について説明があり、審議した結果了承された。

引き続き総長から、今後、軽微な修正については総長に一任願いたい旨発言があり、了承された。

4 令和6年度概算要求施設整備事業について

総長から、資料5に基づき、令和6年度概算要求施設整備事業の案について説明があり、審議した結果了承された。

引き続き総長から、順位付けについては役員会に一任いただきたい旨発言があり、了承された。

【 報告事項 】

1 国際卓越研究大学について

総長から、資料6に基づき、本学が昨年度申請を見送った国際卓越研究大学について、基準の充足状況や今後の見通しの報告があった。

(主な意見)

- ・ TOP10%論文の比率を上げるためには、多くの人に注目される研究テーマの選択に関する戦略が重要である。URA ステーションや DX も活用しながら、多くの人々の知恵で研究テーマを作り上げれば、TOP10%論文の比率も上がるのではないかと。
- ・ 大学側が研究者の意識改革の仕組みを提示し、研究者がそれに従い自分の研究テーマを選択できるようにすれば、個々の研究者が自分の好きな研究を一人で行うよりは、成果が出る。そのような戦略を大学側が提示するとよい。
- ・ イノベティブな研究は、誰も注目していないところにある。TOP10%論文の比率を上げると同時に、注目されていないが大切な研究を見極めながら進めてほしい。
- ・ 教員の定年制度をどう考えていくのか。優秀な研究者が研究を継続することでTOP10%論文の比率が上がるものと考えられるため、シニア研究者の継続的な雇用のシステムについて検討する余地がある。

2 HU VISION 2030 について

総長から、資料7に基づき、前回の本会議における意見交換での議論を踏まえ「HU VISION 2030」のレイアウトや文面を調整し、公開の準備を進めていることについて報告があった。

(主な意見)

- ・ 北大はSDGsで非常に高い評価を得ているため、「Well-being 社会の実現」という表現より、「SDGs」を用いた方がよい。
- ・ 4つの基本理念、ICReDD、IVReD、アイヌは北大らしいが、それらを除くと他の総合大学と違いがなく、北大らしさが見えづらい。
- ・ 4つの基本理念については、「フロンティア精神」「国際性の涵養」等と具体的に記載してほしい。
- ・ 前文に記載のあるアイデンティティについては、北大を特徴づける固有の資産という視点で記載してほしい。寒暖差に応じた研究を行えるという意味で、「四季」という言葉を入れるとよい。
- ・ 単に「社会展開力」では北大らしさが出ないため、「北海道の自然や環境」についてアピールすると、北大を表す資産になると思う。
- ・ HU VISION 2030をどのようにステークホルダーに伝え、浸透させていくかが大事である。具体的には、総長自らが各学部に出向き自らの言葉で説明したり、メディアを集めて発表したりするなど、対話と発信を行ってほしい。
- ・ 内部に対して意思を示すものとして、ビジョンの冒頭に「アイデンティティ」が入っているのはよい。
- ・ 札幌農学校に起源を持つ大学として、アイデンティティの中に「農学」という言葉を入れてほしい。
- ・ 学内構成員が、自分たちの活動がビジョンのどこに位置づけられるのか認識することが重要なので、ビジョンを示した上で具体的な行動を位置づけることが必要である。
- ・ ビジョンを全学に落とし込んだ際に、各学部がうまく実行できるのかという裏付けが見えづらい。
- ・ 全体像について過去の会議で議論されたことが反映されており、ビジュアルがよくなった。これをどう実現していくのかが注目される。

- ・本ビジョンと、国際卓越研究大学を目指す取組や北海道ユニバーシティアライアンスで考えている取組をリンクさせると、よりわかりやすくなると思う。

3 第4期中期目標・中期計画における意欲的な評価指標の指定について

総長から、資料8に基づき、文部科学省国立大学法人評価委員会による、第4期中期目標・中期計画における意欲的な評価指標の審査結果について報告があった。

4 第3期中期目標期間に係る業務の実績に関する評価結果について

総長から、資料9～12に基づき、文部科学省国立大学法人評価委員会による、第3期中期目標期間の業務の実績に関する評価結果について報告があった。

(主な意見)

- ・過去の評価の影響が尾を引いているが、文部科学省に対し、北大の現状をしっかりと説明するとよい。

5 令和4年度 資金の運用状況について

総長から、資料13に基づき、令和4年度における資金の運用状況について報告があった。

【 意見交換 】

1 北海道ユニバーシティアライアンスの方向性について

「北海道ユニバーシティアライアンスの方向性について」をテーマに、増田理事から資料14に基づき説明があった後、種々意見交換が行われた。

(主な意見)

- ・京都では大学コンソーシアムとして単位互換や学生インターンシップなどが行われている。
- ・ジョイントディグリーやダブルディグリーなどができるとよい。
- ・ユニバーシティアライアンスの活動としてサマースクールがあると、外国の大学が参加する可能性がある。

- ・クロスアポイントメント制度について検討し、関わる教員に研究費や管理運営業務の軽減などのアドバンテージを与えないと、活発に動かない恐れがある。
- ・大学の生き残りという意味で、一つの大学だけではなく、地域で組むことは大事である。
- ・一次産業の見直しが盛んになってきている中で、従来と違う形で一次産業を強くすることが必要と言われているが、北海道としての強みが資料から見えない。北海道ならではの取り組みを強調していただきたい。
- ・つながる力が非常に重要であり、オール北海道で新産業を創出することに意味がある。経済界や産業界とつながり、議論を起こしていただきたい。
- ・農工連携の例があったが、社会科学など、文系のアプローチも大切である。理工系だけでなく、文系や社会科学系、経済学分野の連携も積極的に取り入れていただきたい。
- ・北大は全ての学部がある総合大学だが、十分に学部間の連携がなされてきたのか。
- ・1 + 1が1.8になることがないように、将来のありたい姿をしっかりと描いていただきたい。
- ・資料にあるようなことは今までもやってきたのではないか。アライアンスの目的や、どのような最終形を目指しているかが見えない。シミュレーションを行うとよい。
- ・事務局間だけでやるのではなく、組織全体として動くべきである。また、民間を巻き込み大きなテーマで進めるのがよいと思う。
- ・社会との共創や産学連携を行っていくうえで、産学連携やビジネスに明るいコーディネーターの存在や、外部資金獲得が重要になる。
- ・ユニバーシティアライアンスの取り組みはExtensionには寄与すると思うが、Excellenceの向上はどれくらい期待できるのか。
- ・形だけの大学連携になるならExtensionだけでExcellenceの効果はないが、今までなかった研究を一緒にやっていくことでExcellenceにつながる可能性はあると思う。簡単ではないが諦めないでほしい。

(以 上)